丸山神社について

伊奈波神社教学研究員　筧　真理子

金華山登山道「めい想の小径」を少し登ると、「伊奈波神社旧蹟」の石柱と三角形の巨岩（烏帽子岩）がある開けた空間、丸山神社にたどり着きます。烏帽子岩のすぐ背後にはコンクリートの基盤と石垣の跡が残り、坂を登ると祠が建っています。ここは金華山の山裾にほっこりと目立つ丸山の頂上です。今回はこの丸山神社の歴史について取り上げます。

「美濃国第三宮因幡社本縁起」では、丸山と伊奈波神社の関わりについて次のように語ります。伊奈波神社祭神であるイニシキイリヒコノミコトは、弟である景行天皇の指示により奥州から金の丸石を都に運ぶ途中で、天皇の誤解から差し向けられた討手と対戦しなければならなくなりました。戦闘の間、金石は椿原に安置されていましたが、一夜で高さ約一一〇メートルの山となり、戦いに敗れたミコトと王子たちはそこに姿を隠しました。ミコトは因幡大菩薩となって衆生に利益を施され、誤って兄を討伐してしまったと知った景行天皇は椿原の麓に社壇を造らせ、ミコトと王子たち、母后のヒバスヒメを祀りました。これが伊奈波神社の始まりと伝え、椿原が現在の丸山のことと考えられています。

また、烏帽子岩には次のような伝説があります。長良川のほとりに住む男性が物狂いのようになって鏡岩の下に沈む大石を曳き揚げて神前に供えよとしきりに言い、村人が舟を出すと水底に確かに巨岩が見えました。それに綱を掛けて伊奈波神社に運んだのが烏帽子岩だというものです。現在の神社境内、神門に向かって左手にある烏帽子岩は丸山の烏帽子岩を模したものともいいます。

伊奈波神社は天文八（一五三九）年に斎藤道三が金華山から現地に遷座したと伝え、それ以後の丸山には烏帽子岩があるだけでした。神社の再興について『伊奈波神社略誌』（昭和十六年発行）では天保十二（一八四一）年に尾張藩主徳川慶臧（よしつぐ）が岐阜町を訪れたとき（岐阜御成）に、名古屋の須佐之男神社別当である天王坊住職の建議により社殿を創建して伊奈波大神を祀り、丸山神社と号したとします。須佐之男神社とは、名古屋城三之丸にあった那古野（なごや）神社のことです。しかし慶臧が藩主になったのは弘化二（一八四五）年で、在職わずか四年にして十四歳で亡くなっており、岐阜町には来ていません。慶臧の前の藩主である徳川斉荘（なりたか）は天保十四年に岐阜町を来訪していますので、同書で述べるできごとはこのときと考えてよいでしょう。

斉荘の岐阜御成については本誌の平成二十六年一月号ですでに取り上げていますが、ここでもう一度、金華山と伊奈波神社に関わる斉荘の行動を見てみます。

九月二十一日、岐阜町着。

二十二日、七曲道から金華山に登り百曲口へおりたのち、古屋敷の千畳敷を見物、妙照寺で休憩。午後に伊奈波神社を参拝、権現山登山。

二十四日、名古屋帰城。

斉荘がこのときの見聞をまとめた紀行文には、金華山の城跡や砦跡について詳しく書くとともに「達目洞といふあり。稲葉大神古縁起に見えたる古き地なり。むかし墾開きて田畑となりぬ」と述べ、天守台跡から四方を眺めたとき「鏡岩といふあり。天守台の北東の山下、長良川の南岸にあり。ここやことに深き淵にて、水の色藍の如し」と感想を記しています。「稲葉大神古縁起」は「美濃国第三宮因幡社本縁起」のことで、祭神のイニシキイリヒコノミコトが因幡大菩薩として祀られてから約五百年後に難行という僧が千日の勤行をしたところ、白雲に乗って姿を現したミコトたちに達目洞で会えたことが記されています。斉荘は伊奈波神社の縁起について知っていたわけです。また金華山下の長良

川左岸にあった鏡岩は、かつては石面が滑らかで鏡のようでした。大坂の陣ののち徳川秀忠がこの淵で水泳をしたと伝え、烏帽子岩が出現した故地でもあります。

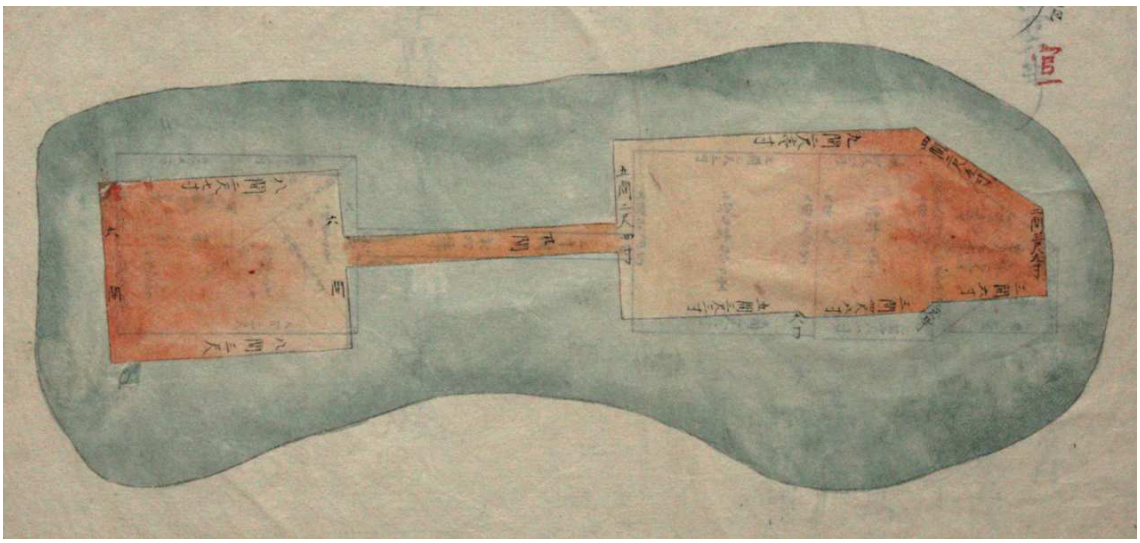
斉荘の御成のときに丸山神社が創建されたという確かな史料は見つかりませんが、以上のような知識をもつ斉荘が伊奈波神社の旧地として丸山のことを聞き及び、それが神社再興につながった可能性は考えられるでしょう。幕末に尾張藩士の小田切春江が描いた岐阜町絵図(伊奈波神社所蔵、岐阜市歴史博物館寄託)では丸山山頂に建物が確認でき(写真1)、これが社殿と思われます。この頃には創建の由来から天王坊が神事を所管しました。

(写真1)

明治初期の神仏分離により天王坊は神事から離れ、社殿は奉仕者もなく風雨にさらされて荒れてしまいましたが、明治八(一八七五)年に岐阜町民の願いにより修繕が加えられ、伊奈波神社摂社に列せられます。しかしこのときは応急処置でしかなかったようで、暴風などで倒壊の危機となり、あらためて明治十二年に三間(約五・五メートル)四方の檜皮葺き本社が造られ、四月十五日に遷宮式と祭典、餅まきが行われました。それがまたも大破となり、明治十九年に経費七十七円をかけて、古い社殿を取り壊し規模を縮小して新造しました。このように建て替えが繰り返されたのですが、明治二十四年の濃尾大地震で倒壊し、小さな祠のみとなってしまいました。

岐阜県歴史資料館には、明治九年に岐阜町から岐阜県へ提出した丸山神社境内図が残されています(写真2)。左が北で、茶色が境内地です。二つの四角形が細い道でつながっており、烏帽子岩は向かって右の区画にあります。この図には建造物が記入されていませんが、烏帽子岩の前には鳥居が建っていました。社殿は江戸時代には向かって左の区画に、明治時代には向かって右の区画に建てられました。現在も残る石垣は、明治時代の社殿の跡ではないかと想像されます。なお、昭和初期や昭和三十年の写真では烏帽子岩のすぐ背後に瓦葺きの建物があります。しかし、これがいつ造営されていつまで建っていたのか、明らかにできませんでした。

明治時代の丸山山頂は木が少なかったようで、北陸の山々が屏風を立てたように遠望でき、西は伊吹山まで見えました。大正時代発行と思われる『美濃名所案内』にも丸山神社は「眺望すこぶる絶佳」とし、「丸山の晴嵐」は岐阜八景の一つです。今では木が茂って山頂からの視界は限られますが、毎年四月二十五日に祠の前で丸山神社祭が斎行されています。


(写真2)